The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	蔵田周忠の建築思想の独自性 : 代表的著作を手がかりに
Author(s)	亀野, 晶子
Citation	デザイン理論. 2011, 58, p. 49-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53588
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

蔵田周忠の建築思想の独自性
── 代表的著作を手がかりに ──

亀　野　晶　子
京都工芸繊維大学工芸科学研究科造形工学専攻

キーワード
表現主義，ウィーン工房，住宅・住居，工芸，
expressionism, Wiener Werkstätte, house and the dwelling, craft

はじめに
Ⅰ　蔵田周忠の略歴と先行研究
　Ⅰ－１　蔵田周忠の略歴
　Ⅰ－２　先行研究
Ⅱ　蔵田周忠の著述分析
　Ⅱ－１　著述と着眼点
　Ⅱ－２　「表現主義」
　Ⅱ－３　「工芸」
　Ⅱ－４　「住宅」
Ⅲ　「表現主義」「工芸」「住宅」を通して
おわりに

はじめに

本論は蔵田周忠（1895-1966）の著作を通して蔵田の近代建築史の捉え方を分析し，そこから建築観を軸に蔵田の独自性を探る。その独自性を明らかにし，蔵田の様々な経歴・各事項をつなぐ要素を発見することを目的とする。

従来の蔵田周忠に対する研究はその様々な活動個々に対するものがほとんどであり，それぞれの活動が蔵田の中でいかに関係づけられているかを明らかにするような視点，相互補完的な考え方を行ったものは少ない。本論はそれら蔵田の多方面にわたる活動がいかに関係づけられているかを把握する，つまりそれらの関係の重要な要素を明らかにする事を目的とする。

結論を述べてしまえば，蔵田の近代建築観が合理性，経済性のみを判断基準として評価するものではないことと，当時の近代建築の流れの中で蔵田は建築家として生活空間を継続させる住宅内部空間を創造することに重きを置いていたことが挙げられる。その視点こそが蔵田の活動全般を関連づける重要な要素である。本論では蔵田の建築観をその著作から探る。蔵田の略歴・先行研究を整理した後，キーワードを中心に複数の著述から蔵田の独自性を導きだす。

Ⅰ　蔵田周忠の略歴と先行研究

Ⅰ－１　蔵田周忠の略歴

蔵田周忠は1895（明治28）年濱岡家の長男として産まれ，1915年に伯父の蔵田家を継ぎ，以後蔵田姓となる。1913（大正２）年に私立工手学校建築科を卒業し，同年三橋四郎建築事務所，1915年曾禰中條建築事務所で働く。「分離派建築会」が旗揚げされた1920年に早稲田大学の選科生となり，1922年の平和記念東京博覧会に技術員として参加する。この博覧会への参加が「分離派建築会」参加へのきっかけとなる。1927（大正16）年に東京高等工芸学校の講師に招かれ教職につく。このことが型而工房への活動につながる。その後1932年から1966年まで武蔵工業専門学校（現：東京都市大学）建築学科の教授として教鞭を執る。

蔵田は三橋四郎建築設計事務所時代，所長の三橋四郎（1867-1915）の影響で建築ジャーナリズムに関わり始める。三橋が逝去した後に同事務所所員関根要太郎（1889-1959）の紹介で入所した曾禰中條建築事務所で高松政雄（1885-1934）に出会う。高松は「建築家の修養」という論文でジョン・ラスキン（1819-1900）の思想を核とする建築論を展開していた。このことにより蔵田はラスキンやモリス，アーツ・アンド・クラフツ運動に接する機会を得たと言える。また1920年設立の分離派建築会には堀口捨己（1895-1984），瀧澤真弓（1896-1983），森田慶一（1895-1983），山田守（1894-1966）など東京帝国大学1920年卒業生６人が会員として活躍していたが，蔵田は東京帝国大学以外の初の会員として設立の２年後より参加し，分離派建築会展覧会冊子への寄稿を行うなどの活動をした。高松との出会いや分離派建築会参加は西欧文化の享受に柔軟な態度をとる若手建築家との関係を生んだ。彼等との関係は後の活動の助力ともなっている。また佐藤功一（1978-1941）の薦めで入学した早稲田大学選科時代には今和次郎（1888-1973）や，後に共同編集も行う森口多里（1892-1984）らと出会う。今との出会いで古民家の研究にも触れ，またそれに繋がって柳田国男（1875-1962）との関係も築く。柳田創設・主催の民俗学研究所編集の『民間伝承』にスケッチを載せた事は幅広い活動を表す事例の一つである。

蔵田自身が教師という職についた時に周囲に教授陣始め興味深い人物が多数挙げられる。木材工芸科の木檜恕一（1881-1943）や森谷延雄（1893-1927），生徒として工芸図案科豊口克平（1905-1991），木材工芸科剣持勇（1912-1971）や渡辺力（1911-）などが在籍していた。

Ⅰ－２　先行研究

蔵田周忠に関する研究は1975年の崎山宗威氏による「蔵田周忠の著作家としての業績について」[1] から2005年の岡山理香氏の「蔵田周忠の山崎邸について ── 近代数寄屋再考」[2] まで著作に関するものや建築物そのものを対象としたもの，そして建築観についてのもの等がある。住宅に関しては，どのような心づもりで設計したかを当時の著述資料と実物の調査とを，整

理・研究した物[3]などがある。本論に関係する先行研究としては，1999年の大川三雄氏の「蔵田周忠の論考にみる「近代建築」観の推移について，昭和戦前期における３つの体系的論考の比較考察」[4]が挙げられる。大川氏は『近代建築思潮』[5]，「建築論」[6]，『現代建築』[7]の三つから蔵田の近代建築史観の変化を読み解こうとした。大川氏の論考の概略を述べると，『近代建築思潮』（洪洋社，1924年）が日本の近代建築史の最初期の通史的なもので，18世紀の古典主義から1920年代のセセッション・表現主義までの時代設定だが，結論の大部分が表現主義にあてられている。次いで２年後の『アルス建築大講座』に収められた「建築論」は「ドイツ表現主義から機能主義的なモダニズムに移行する過渡期において，美やデザインに対する価値尺度に一定の体系を設定することを試みたもの」である。最後は1935年出版の『実用建築講座』に収められた「現代建築」で，ドイツ渡航後の蔵田が時代の潮流を包括的に叙述したというものである。大川氏は「蔵田の視点で近代建築の動向を再構成したもの」で近代建築の捉え方のめまぐるしい変化を「最も顕著に示す一例」であるとまとめている。

蔵田は「人々の生活の改善をめざしてさまざまな活動を実践的に行なっていた」[8]ことが知られている。これは住宅の研究からも，型而工房の活動からも言われることである。しかしこの蔵田に対する認識は，実際の活動を見た結果与えられたものである。本論では，それらの活動が蔵田の思想の中にどのような形で現れているかを明らかにしたい。そこで蔵田の近代建築史の執筆が近代建築のめまぐるしい変化・進行の時期と同じ事に注目し，その変化を同時代的に経験した蔵田自身の変化や固執を探る事が蔵田の独自性を見いだす手がかりになると考える。加えて行動と照らし合わせた時の思想の優位性を失わないよう今回は蔵田の著作のなかで，時代によって一般的な捉え方が大きく変化したものを建築史の著作から選び，一般的な変化との違いや蔵田の思想・考え方を読み解き，またそれを補強しうるものを建築史以外の著作から読み取る。

Ⅱ　蔵田周忠の著述分析

Ⅱ－１　著述作品と着眼点

蔵田は，三橋四郎から建築ジャーナリズムの，佐藤功一からは建築批評の影響を受け多くの著述作品を残している。加えて蔵田の語学力を生かした研究が，建築史の著述作品につながる。本論を進めるにあたって蔵田の著作を大別すると建築史関係，それに付随する芸術・美術史関係，建築製図等専門実用書関係，一般向け書籍，その他随筆・エッセイ類，その他一般書（家庭の主婦向け）となる。これらの著述作品の中の近代建築史関係から上述したように時代による物事の捉え方の変化の大きい時期のものを基準として選ぶ。それが『近代建築思潮』と『アルス建築大講座』に収められた「建築論」の２冊である[9]。

ここで蔵田の著述を読み進めて行く上で手がかりとしてのキーワードを設定する。第一に「表現主義」第二に「工芸」そして最後に「住宅」である。まず「表現主義」をキーワードに近代建築史成立時期の著作を読みとく。これにより，その時代の流れを明らかにし，蔵田の志向につながる要素を導き出す。近代建築史成立の時期に時代の流れに翻弄されたとも言える「表現主義」をキーワードとして読み解くことで，意識や主義主張の変化のなかから，終始一貫した蔵田の視点を見つけ出す事を目的とする。その視点が第二のキーワード「工芸」となる。第一のキーワードにより蔵田の視点を導きだし，第二のキーワード「工芸」で更にそれを掘り下げ，蔵田の志向を探る。「工芸」をキーワードとして再度近代建築史を読み解くことにより，蔵田の志向を明らかにする。最後に「住宅」をキーワードに，その志向を蔵田独自のものであることを明確させるために，近代建築史以外の著作も共に読み込む。ここで「住宅」をキーワードとした理由は三つある。第一に「工芸」で志向を見た時に，住宅との繋がりでの記述が多いことが挙げられる。次に蔵田の著作・実作等様々な活動が住宅に関わるものが多いことによる。そして，「住宅」問題が近代建築史的にも大きな問題の一つであったことも重要な理由のひとつである。様々な問題解決の論議がなされたなかで蔵田の志向が時代の流れに即しただけのものでないことや，他に追従したものではない事を明らかにすることが出来れば，それが蔵田の独自性となる。

ここで「表現主義」をキーワードとして挙げる理由ともなる「表現主義」に対する現在の認識やイメージを確認する。一般に表現主義は1905年ごろからヨーロッパ各地に起った芸術運動から始まり，特徴としては客観的な外部観察よりも主観的な感覚を表現するものとされた芸術運動である。西欧文化において表現主義（表現派とも言われる）は印象派とは対極のものとして位置し，狭義には20世紀初頭にドイツで起りそこから様々に派生した芸術運動とされる。特に建築の分野では1910年頃のドイツ（語圏）から発生し，新材料・新技術，大衆社会の経済性からの実験的なものであった。表現主義自体が個人主義的であったために確たる様式としての規範はないものの建築に芸術性を持ち込み，リアリズムよりも内的要因を外形に持ち出したものが多い。その外形は幻想的であり，新奇であるが，実際の建築物に導く迄のプロセス（図面や模型）を重視した傾向がある。ここで注意したいのは，日本においてはこの表現主義はヨーロッパの芸術運動とはまた別の独自な意味をもっていることである。明治・大正期より，文筆家・芸術家やそれらの集団組織が発行する雑誌等が海外情勢を伝え，新しい芸術運動が意識改革を行っていった。同様に建築の分野でも，建築を芸術的表現とするための運動が生まれる。そのうちの一つが分離派建築会である。日本における表現主義の建築物としては，分離派建築会の活動した時期に彼等が設計を行ったものがその対象となることが多い。日本に於いても個人主義的な活動であったが，特徴としては直線，基壇から上階まで続く窓の上部のアーチ，

表面装飾性や，建築外部の有機・幾何学的な形態[10]など様々である。しかし様式そのものには，当時の社会的背景も含む様々な影響があった。1923年の関東大震災では東京は更地となり，そこに急場しのぎの建築物が建てられ，その外観を飾るものとして使われたものも表現主義の様式と言われる。新しい主義や様式が発展していく段階で，今まで積み上げてきたものがほぼ壊滅的になくなるという状況が与えた影響は計り知れない。

またセセッションという言葉はアカデミズムからの分離を目指したアンデパンダン運動に由来し，1880年代ドイツから相ついで起っている。ベルリン，ミュンヘン，ダルムシュタッドなどで起こり，それらの中で特異なものとしてウィーン・セセッションが挙げられる。ウィーン・セセッションのみが建築や室内意匠の分野で大きく活動した。日本においては分離派建築会の分離がウィーン・セセッションの“セセッション”に由来していることもあり，表現主義的という言葉とともに装飾主義が様式の一つとして認識された時に，セセッション様式というものが広義においては表現主義様式とほぼ同義の認識を不明瞭なままなされたと言える。日本においてセセッションまたはセセッション様式としてもてはやされたのは，アール・ヌーヴォーより新しい，幾何学や直線を加えて構成した図案やデザインを使った家具・テキスタイル・室内装飾などであり，様式として確立したものではなくその当時のみの流行としてである。

Ⅱ－２　「表現主義」

『近代建築思潮』

蔵田が最初期にまとめた建築史の著作『近代建築思潮』の序文「…編者は同氏[11]の意を承けて，近代の建築思潮を最も総合的に且つ平易に解説する事に苦心した。」[12]から，編集の意図が読み取れる。語学力のあった蔵田は，同時代の建築に関する文献を多く読んでいた。また周囲にはすでに渡欧している人物も多くかれらからの直接の情報も蔵田の知識として蓄積されていた[13]。それらをまとめ，蔵田自身の考え[14]に基づいて近代建築を様式主義の流れの後に編集している[15]。蔵田の意図を確認したので以下では「表現主義」をキーワードに読み解いていく。

蔵田が「アール・ヌヴォー」と「ウィーン・セセッション」とを同格の芸術運動として記述している部分[16]は特に興味深い。同時代に起った歴史的に言及すべき項目として二つの芸術運動が挙げられている。現在では「アール・ヌーヴォー」「ウィーン・セセッション」共に一芸術運動としてそれぞれ認識されてはいるが，ウィーン・セセッションについては「ウィーン・セセッション」という名称がそのまま使用，認識されるというよりは，ウィーンの芸術というまとまりに1900年前後という時代区分をあてた芸術運動として見られる事の方が多い[17]。しかも本来は建築が主導の運動であったが，現在は単に建築よりの芸術運動として認識でされている。建築家オットー・ワーグナーがウィーン・セセッションの主要人物であるという認識[18]を蔵田がしている事は同時代を生きた証だとしても，これをアール・ヌーヴォーと同レベル[19]と

して扱う所に蔵田独自の歴史観が色濃く出ている。

蔵田はこれに続いて「アール・ヌヴォー」の前段階としてのモリス，ラスキンを挙げ，特にモリスの工芸運動，理想社会への運動が如何にすぐれたものかを述べている[20]。蔵田はモリスが実際者の最初の一人として果たした成果とその影響が後の近代建築運動や工芸運動につながる事を大きく評価している。その成果が多大に表れたのがウィーン・セセッションであり，「モリスの提唱した住宅に対する統一運動を更に芸術全般に亘って「統一的空間形式」を作ろうとの努力が，モリス等の時代よりも一層革新的に且つ論理的に行われた」と言い，この運動が近代芸術の先駆けだとしている。

蔵田のこの当時の認識としては，近代運動の始まるきっかけを作った「アール・ヌヴォー」と，それを発展させ近代芸術の形を作った「ウィーン・セセッション」とを同様に評価し，それら二つがあったからこそ，後の建築運動につながったというものである。

特にセセッションについての記述[21]では，先述した「統一的空間形式」が，近代の技術とともに過去の形式的伝統にとらわれる事なく創造されることが近代芸術であり，その形式的伝統から離れることは実在の真を捉えることだという認識が見て取れる。形式的な様式美ではなく，時代の技術や考えを反映した空間を新たに創造していくことが近代の正統性であり，その時代の変化を認識していたということになる。そして「ウィーン・セセション」の重要な人物として，オットー・ワーグナーとヨーゼフ・オルブリヒ，ヨーゼフ・ホフマンそしてコロモン・モーザーを挙げ，彼等がセセッション運動の創立に大いなる意義を果たしたと続く。

『近代建築思潮』では蔵田の知識と考えで，様式主義以降の近代の始まりからを書いた著作である。そこには現在とは異なるウィーン・セセッション本来の姿を捉えている。しかも近代の芸術動向，それに伴う建築動向の始まりをウィリアム・モリスに見，その流れでの「アール・ヌヴォー」評価，そしてそれを近代の技術，「統一的空間形式」を革新的かつ論理的に発展させた評価として「ウィーン・セセッション」を挙げ，これが近代芸術の先駆けだとしている。そしてこの二つを近代芸術の大きな基点として同様に評価しているところが蔵田の視点と言える。「ウィーン・セセッション」については創立に関わった人物として，ワーグナー，オルブリッヒ，ヨーゼフ・ホフマンを挙げている。現在のウィーン・セセッションの主要人物とは若干ことなるが，これも先に挙げた時代性とこの当時の生の感覚だと考えられる。

『現代建築』

『現代建築』という著作名と序[22]に「建築の動きを主として」とあるように明らかにこれは建築史の書籍である。写真付きの作例の項もあるが，出版当時の現代の建築を紹介するのが主の目的である。ここでの蔵田の認識は，15年前の『近代建築思潮』の表現主義より歴史的に進んでいる。第二章1920年代の建築で表現主義を採り上げてはいるがしかし，その内容は一

過性のものという印象が強い。日本において表現主義は，関東大震災後の時期に「丁度」重なり一時「外面的の流行」をなしたと述べ，結論としては「徒らに外形の変態に狂躁した表面的な浪費の時代であったと考えられる」と締めくくられている。そして西欧建築動向としての表現主義の記述の中に，「ウィーン・セセッション」は全くでてこない。

分離派建築会が宣言文を出したのが1920年で，蔵田が加わったのが1922年であり，この『現代建築』の出版は1935年である。先の記述も含めると，出版当時表現主義建築はすでに過去の様式となり，その源泉とされたウィーン・セセッションについても，建築史のなかで必須の項目ではなくなっていたと蔵田が判断したのかもしれない。この15年の間に渡欧したことも関係しているのだろう。しかしウィーン工房についての記述[23]はあり，内容も好意的である。

『近代建築思潮』にもあったヨーゼフ・ホフマンの名はここでも挙げられている。しかしここでの大きな違いは，セセッションとではなく「ウィーン工房」とともに挙げられていることである。「ウィナー・ウェルクシテッテ」とはドイツ語で Wiener Werkstätte と書く。Werkstätte は工房の意であるので，つまりウィーン工房のことである。『現代建築』のなかで特に家具や工芸に就いての記述をわざわざ述べているのはウィーン工房だけであること[24]は注目に値する。ウィーン工房についての記述はそれだけではない。

表現主義的手法の表面性が強くなったものが「新ロココ」趣味を招きその意匠が顕著に表れたのが「ウィーン工房」においてであるということなのである。序に見たように建築主体の流れの中でウィーン工房のみ工芸への隆盛の記述がある。又工房自体の評価の高さは他の部分と比べても特異である。それはバウハウスが閉鎖するに至った状況と重ね合わせたような明らかに肯定的な文章と，閉鎖自体を惜しむ文章[25]からもわかる。

以上２冊から，表現主義が時代の変化の中にあったことで，その時代性を色濃く表している事が再確認できた。そして表現主義をキーワードとしてみたことで蔵田思想の変化が見て取れた。具体的には『近代建築思潮』においては近代芸術史を概観したうえで，建築近代運動のきっかけをウィリアム・モリスに見，その後のアール・ヌーヴォーをその発展として評価し，それら近代精神を発展させ統一された形にしたのがウィーン・セセッションである。そしてそのウィーン・セセッションの重要人物として建築家オットー・ワーグナー，ヨーゼフ・マリア・オルブリッヒ，そしてヨーゼフ・ホフマンを挙げている。次いで15年後の『現代建築』では，1920年以降の建築を紹介するという形で各建築動向を解説し，国際建築という章立てでバウハウスやコルビジェにも触れている。その本文中で「ウィーン・セセッション」の語が一切出てこないことと，蔵田のそういった建築史の判断の中「ウィーン工房」に就いての記述が多く見られること。そしてそれはヨーゼフ・ホフマンの名とともに記されている事。またバウハウス閉鎖の状況に引き合いに出されるほど，ウィーン工房閉鎖についても惜しむ表現をし

ている。以上が表現主義をキーワードとして蔵田の変化を見た結果である。

Ⅱ－３　「工芸」

「工芸」をキーワードに上記２冊をもう一度読み直してみる。

表現主義という建築史の事実についての認識の変化を読み解く中で，蔵田が建築の歴史が芸術運動の影響下にあるという事を強く意識していた事，そして芸術の中で建築に近い関係にあったのが工芸であるということがわかる。近代運動前期においては，その工芸の分野での革新が大きくとりあげるべき事柄であり，その中でも「アール・ヌヴォー」（もとをたどればウィリアム・モリス，そしてラスキン）そしてセセッションというよりは，その工芸部分での発展に活躍を見せたウィーン工房に注目していた事がわかる。この二つの運動に対する大きな違いは，その終わり方に対する言葉に如実に表れている。モリスの場合，実際的に運動を起こしたがゆえの問題がモリスを社会主義運動にむかわせ，モリスによって「覚醒され」たアール・ヌヴォーは，「近代経済組織や科学的思想と相容れぬもの」[26] となり，芸術運動として終わりを迎えたことを述べている。一方ウィーン工房は，「惜しむべき閉鎖」[27] という言葉からも分かるように，自然淘汰的消滅というよりは，社会情勢的な原因といったニュアンスが強い。このことと，『現代建築』に「セセッション」の語がない事を考え合わせると，蔵田周忠のウィーン工房への評価は，建築史の流れの中での重要思想団体「ウィーン工房」ではなくヨーゼフ・ホフマン率いる工芸集団「ウィーン工房」そのものに対すると考えられる。蔵田がバウハウスを評価しているのは教育機関として，デザインを体系的に組み直し，それを社会に適応させたというところである。つまり社会に適応させる事が蔵田の考える住宅問題に対する解答の一つとして当てはまっていたということになる。一方「ウィーン工房」は思想から出発した作品の質の高さを評価している。ここでいう質とは「統一的空間形成」[28] を作り上げられるということである。思想ありきの成果発表としてのではなく，人々が住まい・生活する場としての住宅内部空間に重きをおいていたことが，ヨーゼフ・ホフマンを評価したうえでのウィーン工房評価に繋がっている。この事は文面からは明らかには伝わってこないが，「工芸」をキーワードとして読むことにより見えてくる。これが蔵田の志向する方向を指すものである。

ここで思い出すべきは，蔵田が曾禰中條建築事務所にて「建築家の修養」というジョン・ラスキンの思想の論文を書いた高松政雄から知り得た“生活と芸術”への関心という側面があったことである。「ウィーン工房」と「アーツ・アンド・クラフト運動」「モリス」「ラスキン」のつながり[29] が蔵田にとって重要であったことが想像できる。工芸運動を建築史理解の必要不可欠な重要事項として考え建築を語っている事に関係する時代背景として，住宅の問題があると考えられる。以下では「住宅」をキーワードに著述作品を探る。

Ⅱ－4　「住宅」

『現代建築』を内容で判断すると全体の半分以上が，産業革命・大戦による各国共通の住宅問題を占めている。その中に蔵田自身の註で興味深い部分がある。「この点を現代建築の優れた解説者として知られたアードルフ・ベーネがその著『現代目的建築』(1) に於て次の如く説述している。」[30] に添えられた註の部分[31] である。蔵田は特に，世界的共通問題として「住宅」が論議された通史においてアドルフ・ベーネ著『現代目的建築』(Adolf Behne “Modern Zwecbau” 1923年)（仲田定之助，川喜田煉七郎訳）を註とし，「現代建築の動きを三つの発達段階に分けて，良き解説を興へている。」と述べ，「きわめて興味ある資料である。」と添えている。建物の表皮・表面：ファサードから，中身：空間形成への移行，そして空間形成に機能が伴い「家」自体へ視点が移り，そして活動・行動：実際的構築に向かった現代建築（現在の近代建築）の動向という「住宅」の問題のよき解説であり，きわめて興味深いとしていることは注目に値する。

同様に日本でもこの「住宅」の問題は社会的な要請であった。大正から昭和にかけて，日本では一般的に生活改善運動が行われた。昭和に入ってから住空間に及んだその運動は，合理化＝西欧化が政府主導の元行われていた。蔵田もその実践者[32] として，またその啓蒙活動の一役を担った人物[33] としても時代を生きた。各国共通の住宅問題が近代建築にとって重要なことは『現代建築』の半分以上を住宅関連の記述に当てられている事からも明らかである。と同時にウィーン工房に関する記述については先に確認した。つまり蔵田は，「工芸」と「住宅」を切っても切れない問題として考えているという事である。アドルフ・ベーネの註を，「興味ある資料」とわざわざ紹介していることからも明らかであるが，『近代建築思潮』からもそれがうかがえる[34]。建築の動向を同時代的に紹介する著作の中にも，このような工芸とのつながり，また工芸を重要視する姿勢は「工芸」と「住宅」を離し難く考えていた蔵田の特質が現れている部分として挙げられる。建築を住宅と踏み込んで解釈しても問題はないだろう。そのことが後年の蔵田の著述『民家帖』には明確に著されている[35]。

『民家帖』は蔵田が早稲田建築科選科生の頃からの恩師今和次郎と柳田国男の民俗学的な民家研究の影響が形になったものである。これは1950-1953年にかけての調査時スケッチをもとにまとめられ，1955年（古今書院）に出版されたものである。蔵田が民家研究を始めるきっかけは今和次郎の「民家のスケッチを深く尊敬し追随した」ことからはじまるようである。絵に興味のあった蔵田が今のスケッチに憧れたことから始めた民家のスケッチをまとめた書物ゆえに，民俗学的な考え方のみではない蔵田独自の視点を見ることが出来る。

住居が建築的意味のみではないと語り，そのうえで衣食住の問題が生活様式に不可欠な情報を与えてくれる事を蔵田は強調している。建築だけではなく生活様式に重点を置く考え方はつ

まり建築内部空間に対する視点の現れである。これは先ほどのベーネの言う「空間形成から，實生活と関連して更に実際的構築に向かった。」ことと同じである。空間形成にはそこに生活する人々の活動や行動が加わって成立する実際的構築を重要視している事と，ベーネの註に興味を示した蔵田の意識が後年まで保たれていることが読み取れる。そこからは民俗学的な視点を述べているにもかかわらず，建築家[36]として生活を行う場「住居」の方により関心があることがわかる。特に近代建築の持つ住宅問題の実際的構築の要素である活動・行動に続く次の段階として時間という要素に対する意識が読み解ける[37]。生活そのものが育ち，守られるという時間の経過を得てこそ，人が生きる場としての住居という意識も読み取れる。それは住宅も成長していくことを前提とした時間の継続を想定するという蔵田の独自性と読み解ける。

人々が生活を行う場としての住宅を考える時，外側や構造だけではなく内部空間も存在する。この認識には，ウィーン工房の評価である「統一的空間形成」の合理的な思考と，ベーネのいうファサードから家屋へ，そして空間形成へ，そこから実生活との関連による実際的構築が含まれている。ここに『住宅と時間：人の生きる場が継続することに対する意識』を加えたことが蔵田の独自性として挙げられる。また「統一的空間形成」の合理的な思考はバウハウスの評価[38]にも繋がる。生活空間が建築において総合されるべきものであるという考え方は，建築家として社会に対する責務のようなものが感じられるが，その実現のためには「工芸・工作」[39]の一貫性が不可欠であると蔵田は説いている。その近代的な結実を果たしたのがバウハウスであり，だからこそバウハウスの成果が一般化されたというものである。機能を合理的思考でもって形にするのに必要なのがこの時代の工芸であり，工作であるという蔵田の考え方は，一見両極に思える民家とバウハウスとに対する評価も，活動・行動の継続がベーネのいう３段階の次の段階へ進んだ考え方，つまり活動・行動といった生活・経験の積み重ね，『住宅と時間』の両極に位置するものだと考えれば，一貫したものと捉えられる。建築内部空間の機能として人が生活を行うという大前提と，それを継続させる事の重要性が常に頭の中にあるからこそ，民家にも，バウハウスにも，真摯に向き合えることができたと考えられる。

Ⅲ　キーワード「表現主義」「工芸」「住宅」を通して見える事

以上のことより建築家として生活空間の創造とその継続に重きをおいていたことが蔵田の独自性としてあげられる。

まず「表現主義」から見えた蔵田の視点はアール・ヌーヴォーとセセッションを建築へとつながる近代芸術の重要な運動としてみたこと，そしてセセションからウィーン工房へと重点が移っていった事である。セセッションへの視点は芸術と建築が同軸の上にある事を示し，ウィーン工房への評価は芸術と建築をつなぐものが「工芸」であることを示している。そして

それは，近代工芸による生活空間の統一性への評価へと繋がる。次に「工芸」から明らかになった蔵田の志向を確認する。アール・ヌーヴォーとウィーン・セセッションへの決定的な評価の違いはそのままウィーン工房への評価へ当てはまる。工芸を組織的な集団にし，合理性を統一感へと繋げる事，つまりある一定の思想・考えのもと，実際的な製品としての質を高めていくことが，近代建築の問題解決への重要な糸口として考えられている。それが蔵田のいう近代「工芸」であり，ここでいう近代建築の問題とは勿論，住宅内部つまり生活空間に対するものである。この近代「工芸」の先駆的な立場をとったのがウィーン工房であり，それを社会へ適応させたのがバウハウスであることがバウハウスの評価にもつながる。この視点が後の蔵田の実践の方向性を導いたことは容易に想像できる。最後に，「住宅」をキーワードとして蔵田の独自性を明らかにした。「工芸」からは，住宅の生活空間の合理的解釈の方法が近代「工芸」にあることが蔵田の志向として明らかになったが，「住宅」をとおして見る事によって，活動・行動といった動きを空間にとっての必要不可欠な要素として考え，最終的にはその継続までをも範囲として考えていた事が確認できた。それは民家研究とバウハウス評価といった対極と捉えられるものへの蔵田の関わり方からも見出せる。この活動・行動といった生活の動きとその継続が蔵田の独自性として挙げられる。つまり住宅としての建築内部空間は生活を，行動・経験を蓄積させることで成り立つ場であり，人が住み続けることを大前提とした機能が備わっていなければならない「継続」という考え方が独自的と判断できる。当時問題になっていた住居の合理性が世界的には数量や衛生に対するものであったこと，また日本国内においては合理化＝西欧化といった解答が有力であったことからも，独自性は明らかである。

蔵田の独自的思想の現出としての実践・活動は世界的な住宅問題や日本国内での住宅問題の解答としてなんらずれのないものであるが故に，当時の様々な事項と同列に扱われてしまうかもしれない。それは合理化と機械化の結晶のようなバウハウスや，最小限住宅がCIAM[40]で議題とされ住宅を「住むための機械」と断言したコルビジェ[41]などを評価していることも関係するだろう。しかし蔵田の評価は時代が目指した合理化＝西欧化の基準の枠内だけではなかったといえる。

おわりに

以上により蔵田の活動をつなぐ蔵田独自の建築観を明らかにする事が出来た。蔵田の独自性は，近代建築が問題とした住居の合理性・経済性を超え，人が住まう住宅が継続することに対する意識を持っていたことである。このことは蔵田の同時代的な世界の建築情勢の把握と共に，日本という国の持つ風土性や地域性に対する積極的な姿勢[42]から培われてものではないだろうか。このことも蔵田の活動全般を関連づける重要な要素となっている。

今後は蔵田の実践としての「型而工房」や，また教育者としての蔵田の影響を受けた教え子たちの就職先やその後の活動を探って行くことも必要だと考える。

註

1　崎山宗威「蔵田周忠の著作家としての業績について」（『日本建築学会学術講演梗概集　計画系（50)』，1975年）

2　岡山理香「蔵田周忠の山崎邸について ── 近代数寄屋再考」（武蔵工業大学『人文社会紀要（23)』，2005年）

3　岡山理香「等々力住宅区の三輪邸について ── 蔵田周忠研究（1)」（『日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』，2009年）

4　大川三雄「蔵田周忠の論考にみる「近代建築」観の推移について，昭和戦前期における３つの体系的論考の比較考察」（『日本建築学会学術講演梗概集　F-2』，1999年）

5　濱岡周忠『近代建築思潮』（洪洋社，1924年）（以下＊１とする。）

6　蔵田周忠「建築論」（アルス建築講座，1926年）

7　蔵田周忠『現代建築』（東学社『実用建築講座』，1935年）（以下＊２とする。）

8　岡山理香「等々力住宅区の三輪邸について ── 蔵田周忠研究（1)」（『日本建築学会関東支部研究報告集Ⅱ』，2009年）

9　『建築論』については現存している書籍が少なく今回入手が出来なかった。これについては，入手でき次第分析・研究を進め，本論をより強固にする手だてとしたい。

10　森仁史「なぜ今表現主義なのか ── 1900年代からの流路」（『躍動する魂のきらめき　日本の表現主義』展図録，栃木県立美術館，2009年）には造形的特徴として「頂部を持つ建物が多いこと」が挙げられている。

11　同氏とは『近代建築思潮』計画者森口多里のこと。『近代建築思潮』執筆刊行時はパリ滞在。

12　＊１，p.1

13　「畏友堀口捨己氏が欧露巴旅行から帰朝した。（中略）昨年堀口氏の滞欧中に若くして逝いた天才クラーク氏其他の作品を本書が逸した事を深く遺憾とする。」＊１，pp.116，117

14　「近代的なる近代建築思潮の根本主流は，ロマンティシズムとの波の絶え間なき起伏とその合一への翹望に現れるものとする見解を以て叙述全体の主題としたものである。」＊１，p.3

15　「『近代建築思潮』は，数冊の外国書を参考としているが，蔵田のオリジナルの著作と考えられる。」（註１に同じ）

16　「新時代の新しい思潮が建築に影響しない筈はなかった。同じ十九世紀末に起った新運動が二つある。一はパリを中心とする「アール・ヌヴォー」のそれと，他はウィーンに起った「セセッション」のそれである。いづれも因習的建築に抗い新時代の新しい建築を古い形に無理にあてはめる事を止めて，直接建築の本質を究明して是に創造的芸術形式を企求したのである。故に彼等は伝統を離れて一は直ちに自然の物像に暗示を求め，其表現が「アール・ヌヴォー」に発達した。他は自然美其儘の形式的

王湯でなく，寧ろ科学的自然性を知的に且つ自由に取扱った「セセッション」非模写的表現に到達したのである。」＊1，p. 60

17 「ウィーン世紀末 ── クリムト，シーレとその時代 ──」（セゾン美術館，1989年），「ハプスブルグ王朝の都 ── ウィーンの歴史と芸術」（名古屋市博物館，1997年），「ウィーン，生活と美術　1873–1938」（府中市美術館，2001年），「ウィーンの夢と憧れ ── 世紀末のグラフィックアート ──」（豊田市美術館，2003年）

18 現在では主導的人物としてクリムトの名が挙げられることが多い。このことからも芸術運動の一つとされていることが読み取れる。

19 現在では「アール・デコ」が名称と表現（曲線と直線）とともに対置されることが一般的である。

20 「即ち英国に於けるウィリアム・モリス等の工芸運動は美術工芸それ自身によく近代精神をみちびいたばかりでなく，更に発展して建築の革命運動に大いなる衝撃を興えた事である」＊1　p. 61「モリスはラスキンの力説した所の，趣味の救済，生活の善化，芸術的社会の建設を理論から実際運動に移した最初の一人である。」＊1，p. 63

21 「「セセション」の語義は分離を意味する。此運動は積極的に新時代の藝術を創造せんがために，総べての過去の形式的伝統とあらゆる高速に分離し，直ちに實在の眞を捕へんとする要求に立っている。曩の英国の工芸運動に刺激されて，工藝品乃至家具に始まり室内乃至建築に及ぶ生活の藝術的様式を，全体として，新しい世界に持ち来す観念が，此運動によって徹底的に表現されたのである。モリスの提唱した住宅に対する統一運動を原理とし，更に藝術全体に亘って「統一的空間形式」を創らうとの努力が，モリス等の時代よりも一層革新的に且つ理論的に行われたのである。」＊1，pp. 69–70

22 「本講に於ては，（中略）本来歴史的な論述は，年月の上で一定の距離を置いた方がより的確であり，近視的過誤をおかさないでよいのであるが，現代に生活し，現代から将来にかけての設計をなすべき建築家としては，その現在立っている足元の現代及びそれの全体的な形勢なり，主潮の動向なりを整理して明確に大局的に理解してをくことが，最も重要な学習の一つではないかと思う。

　そこでここには各専門家の著書及び専門雑誌の記述に学び，之に筆者自身の見聞を加えて，出来るだけ客観的に実際的に，事実の記述と紹介とに努め，既に読者が雑誌其他で承知されている材料を一応整理し，之に講義としての体系を興えてみたのである。この約十五年間の動きの中から，前後の関係で注目すべき重要な項目を摘出して，発達史的に大勢を述べた。── 主流に沿うて太い一線を引く事を企てた ──（以下略）」＊2，p. 1

23 「「新ロココ」に形成は独逸でよりもウィーンの ── それも主としてヨセフ・ホフマンの指導するウィーナア・ウェルクシテッテの意匠に表はれた。殊に工藝界の天才と云われたダゴベルト・ベッシュ（Dabobert prche, 1887–1923）の尖鋭な表現はロココの繊細さを巧みに現代化したものであった。ホフマンのような大家もこの方向に新意想の表現を見出すようになっていた。そして工芸品の新流行としてかなり後まで巴里の工藝界に影響した。」＊2，p. 22「かなり後までパリの工藝界に影響を及ぼした」とあるのは先にも挙げたアール・デコの事を指すと考えられる。

24 バウハウスについても章立てして解説している。建築運動・団体そして教育機関として全体的に記述

する必要があったと思われる。バウハウスについては後述する。

25 「1932年に自ら閉鎖を余儀なくされた功績あるウィーナア・ウェルクシテッテの運命にも見られるが，バウハウスの場合はより多くの政治的動因に基づくものである。」＊２，p. 68,「戦後経営も今は一段落となり，不況の余波を受けて，三十年の歴史を有し，ゼツェシオン時代に活躍した Wiener-Werkstuätte は1933年遂に閉鎖されてしまった。」＊２，p. 106

26 ＊１，p. 68

27 ＊２，p. 65

28 ＊１，p. 70

29 「ウィーン工房がその本来の着想を熱心に見習っていたのは，チャールズ・ロバート・アッシュビーと，彼が1888年に創設したギルド・オブ・ハンディクラフトだったのである。」『ホフマンとウィーン工房展図録』（豊田市美術館，1996年）p. 45

30 ＊２，p. 4

31 「註（1）Adolf Behne, “Modern Zweckbau” 1923年アドルフ・ベーネは此書で現代建築の動きを三つの発達段階に分けて，よき解説を興えている。即ち（Ⅰ）「ファサードから家屋へ」…前代まで時は建物も外観を取扱ふのが建築家の仕事だった，が現代になると家屋は何のために在るのか，家屋の機能とは何かというように，建築家が「家」自体に就て考へはじめた。（Ⅱ）それから空間形成へ。建築家は「家」の機能に基づいて之を如何に，そして如何なる材料で形成するかに向った。（Ⅲ）空間形成から，實生活と関連して更に実際的構築に向かった。そこに建築の工業化と合理化が問題となる。── とふように述べているきわめて興味ある資料である。（以下略）」＊２，P. 4

32 「生活と芸術の融合という理想を持ち住宅に眼を向け続けた蔵田を中心として産まれた型而工房についても「ウィーン工房」のイメージを重ね合わせたと言われている。「型而工房」では生活工芸を求め，家具の調査・研究・製作・販売を通じて日常生活の変革を模索する事になる。」INAX REPORT No. 177（INAX, 2009年）p. 5

33 建設省『明日の住宅と都市』（彰国社，1949年）に「住居の集団共同化」を執筆。

34 「殊にホフマンは京もウィーン工芸学校の教授として尊敬を受けているばかりでなく，建築を中心とする新工芸の指導者としてなほ後輩から敬慕を受けている。」＊１，p. 75,「…即ち工芸は…構造の鮮明と合目的とに認めた。建築家もこの努力を速やかに受け入れて，後の主に述べる二つの思想が生まれた。」＊１，pp. 84-85

35 「もちろん「住居」の問題は，家の建築のことに限らないが，衣食住の問題は，生活様式を具体的に把握するために欠くことのできない主題である。」『民家帖』（古今書院，1955年）（以下＊３とする。）p. 13

36 「建築家としての目と民族学的な感性とを以て」＊３，p. 3

37 「家に関する習俗・民間伝承だけを調べるのも民俗学の仕事の一つであり，生活の理解にとって有用である。家を中心とする居住の具体的な事柄からはいって，「心意現象」の方の民俗問題に近づくことも，たしかに一つの順序である。それからまた，家のことを単独に考えても，民俗学の大切な一項

目であることは，常民の生活そのものが育てられ守られてきたのがこの「家」であり，住居であることからも考えられるし，居住に関する民俗が多くの資料を含んでいることもまた自明である。」＊３，p. 13

38 「建築に於いて総合される生活空間の全ての部面の工芸・工作の中に一貫する近代性を創造しようと企てて立派に成功したのである。それは思想の上では既に近代運動の初頭に於て，ウィリアム・モリス等の考えた総合的なオルガニゼーションの動きにつながるものであり，Art and Crafts mouvement から，Art Nouveau そして Sezassion とつづいてきた一連の近代的ムーヴメントはこの Bauhaus にきて，内容・形式共に有機的な時代の生産に達したのである。」「バウハウスはこのようにして建築・工芸を通じて生活空間の創造を企図したものであり，具体的な成果は既に現代生活のなかには一般化されてきているのであるが…」「ワルター・グロピウス教授を迎える」（『建築雑誌』社団法人日本建築学会，1954）

39 同上

40 Congrès International d'Architecture Moderne：近代建築国際会議。1927年国際連盟本部設計コンペで表面化した近代建築推進派と保守派の対立に端を発し開催された。1959年までに11回開催される。最小限住宅は1929年ドイツ，フランクフルトで開催された第二回会議の時のテーマである。

41 Le Corbusier（1887-1965）の著作『Vers une architecture.（邦題：建築を目指して）』（Paris, 1924）の中にある様々な議論を呼んだコルビュジェの建築思想を示す代表的な言葉。

42 蔵田周忠「日本近代建築の研究：国際環境に於ける日本近代建築の史的考察（学位論文）（建築史）」（『建築雑誌』，社団法人日本建築学会，1960年）